

タイトル：MEIS2/MEIS 機関研究員／非常勤研究員発表会

日時：2011年4月28日（木） 13:30-18:00

場所：AA研 マルチメディアセミナー室（306）

吉村 貴之（AA研 ジュニアフェロー）

「アルメニア「祖国帰還」運動と在外コミュニティ」

<発表要旨>

第一次大戦中のオスマン帝国政府により、アルメニア人は虐殺・追放を被り、その一部はフランスの保護でシリア・レバノンの地に根を下ろした。追ってアルメニア系政党もこの地での活動を開始する。アルメニア「第一共和国」（1918～1920）の政権与党ダシュナク党（アルメニア革命連盟）はソヴィエト政権成立後に亡命し、徐々に勢力を拡大した。オスマン帝国下のアルメニア人エリート層を中心とした民主自由党も、虐殺を逃れた党員が浸透し、社会主義政党フンチャク（鐘）党と連携した。そして、1920年代の末には、ソヴィエト・アルメニアへの「祖国」救援運動などを通して在外知識層は、親ソ派の旧オスマン・アルメニア人エリート（民主自由党とアルメニア慈善協会）の支配する陣営と反ソ派のダシュナク党の支配する陣営に分裂した。一方で、アルメニア使徒教会のキリキア・カトリコス座が1930年にベイルート郊外のアンテリアスに移り、ソヴィエト政権の影響下にある「本国」のエチミアジンのカトリコス座から自立し始めた。

1945年12月以降、ソヴィエト・アルメニア政府は親ソ派やアルメニア教会に働きかけて在外同胞の「帰還」運動を展開した。反ソ派のダシュナク党も、戦後直後は「祖国」に支持者を送り込んでいたが、やがて極右グループが党を支配するようになり、46年後半からは反「帰還」運動に転じる。1956年2月に行われたキリキア・カトリコス座におけるカトリコス選挙をきっかけにアルメニア使徒教会の組織はダシュナク党が支持するキリキア派と民主自由党などが支持するエチミアジン派に完全に分裂した。アルメニア教会が戦後の「帰還」運動に関与したことが、シリア・レバノンの在外同胞の「祖国」移住を容易にしたものの、かえって送り出し社会の細分化を深める結果ともなった。